発達障害幼児の集団療育（その2）

―― 2者関係の確立を基盤としての集団志向へ ――

村上英治　江口昇勇[1)]　浅田くに[1)]
西尾敦子[2)]　山田敬子[3)]　大角美穂子[4)]
永川邦久[2)]

I　MRTグループでめざしたもの

私どもは，重度精神発達障害幼児の集団療育に関するここ数年にわたる療育実践の中で，たとえ，どんなに障害が重かろうとも，彼らを，独自の生を生きる，一回限りの歴史性をになった人間存在として理解し，援助しようと志向するひととの「出会い」，「かかわり」によって，その子どもなりの成長がみられることを明らかにしようと模索してきた。（沼尾1973，後藤1975）

今回の，私どもの取り組みも，基本的にはそうした視点に即したものであることは，すでに「序説」にのべたとおりである。ただ，私どもは，従来の実践的取り組みの中で，ややもすると「療育者－子ども」といった2者関係の確立が中核の問題としてとらえられ，たとえ集団的な場は設定されようとも，やはりひとりびとりの子どもの成長・発達という面に焦点を定めすぎてきたのではないかとの反省に立ち，今回このMRTグループでの実践では，集団への志向といった視点をより展開させることに，重点を置くことにした。つまり，そうした2者関係の確立を基盤にした上で，それらそれぞれの2者関係が一つの単位となって，集団を形成していく過程を追っていくこと，そして，そうした方向性にどこまでも即すことによって，これら障害をになった子どもたちにもそれなりに，自分がいま集団の中にあることの位置づけを認知することを可能ならしめるだろうし，またその相互連関の構造，プロセスを明確にしていくことが，子どもたちの成長・発達の促進により有効に作用するであろうと考えたからにほかならない。

あらためていうまでもなく，およそ子どもにとっての集団とはそれ自身，自ら集団を構成し，集団の成長を促進させる力であると同時に，そうした集団の成長によって，自らの成長・発達の資源とするといった，相互連関の中でとらえられるものである。しかも，それらはかならずしもただ単に，成長・発達といった望ましい方向への展開のみとは限らない。集団の停滞が，時には個人の退行を引き起し，発達の阻害となることもあれば，逆に個人の停滞が，集団を不活発で力ないものにしてしまうといったマイナスの連関の生ずることも決してないとはいえないのである。たとえさまざまな障害をにない，発達の遅滞がみとめられようとも，人間が人間との相互のかかわりの中で形成され，発達が促進されていくものだとの大前提に立つ限り，これら障害児たちとの取り組みの中でも，こうした一般論は，まったく同じように準用できるものと考えていくべきであろう。私たちが障害の重い子どもたちにこの種の集団療育を意図しているのは，こうした意味において，一般普通とよばれる子どもの発達過程とそのみちすじにおいては，基本的に何ら違いのないことをおさえておきたいためでもあるが，しかし，その障害があること，遅滞があること，という事実そのものは歴然としているが故に，周到な用意のないまま集団の中でのぶつかりあいをただ体験させるということでは，逆に多くの混乱をひきおこし，先程のマイナスの面がより目立ってくることもまた当然予想されよう。2者関係といった取り組みの状況をまず設定し，その確立を基盤としての集団形成への志向という視点を強調したいと願うのは，まさにこの意味においてである。

さらにまたこうした模索の視点は，決して単に対象となる子どものみにむけられるべきではない。それらとかかわる私ども療育者自身の内的成長・集団への志向性ということが，それ自体意義をもつと共に，それがまた直接・間接，子どもたちのこの種の方向性への展開に，より資するものと確く信ずるが故に，この一年にわたる療育の流れの中で，その都度その都度，たえず2者関係の

1）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（前期課程）
2）前名古屋大学教育学部研究生
3）一宮市立中部中学校
4）愛知学院大学文学部

確立を念頭におきながら，私たち自身いかに集団志向をめざしてかかわりつづけてきたか，その姿勢が常に問題とされてくる。きびしい問いかけの前に自戒を忘れてはならない所以である。

ところで，まとめていく上での具体的手続きは，以下次のようにすすめられた。

1）子どもたちひとりびとりの成長・発達をまとめる作業の中で，子どもたちがそれぞれになっている，さまざまな個人差とか特性とかを超えて，ともかく機能として集団に参加してゆくプロセスに共通にみられた現象を私どもは抽出していこうとする。この線に沿って，この年，ＭＲＴグループの実践の中から見いだされた共通のプロセスを，一応私どもは２者関係の確立を基盤としての集団志向への「歩みの段階」と名付け，それぞれの段階にネーミングを与えることを試みた。表１に示すところである。

対象児の年令差・能力差にかかわらず，そのひとりびとりがそれぞれの療育のセッションごとに，いまどのような段階にあるかは，担当療育者によってその回ごとの記録をもとにして，整理され，それらの「歩みの段階」の記述にもとづいて，まず独自に段階づけが与えられた。そしてなおそれらが恣意的なものでなく，かなりの公共性をもつものたらしめるべく，最終的な判定は全員の討論によってなされた。

ひとりびとりの子どもについて療育セッションごとにこうして行った段階づけを，横軸に療育の流れをとった上で，その時点時点でプロットしていくとき，少なくともこの視点に即しての集団志向への「歩みの段階」をうかがい知ることができよう。ひとりびとりに即しても，これらの変化を追っての時期がまず区分された。具体的には「個別の動き」の章でのべられる。

2）次には，こうしたひとりびとりの変容を基盤とはしながら，なおも集団としての歩みを同じような視点で大まかにながめていくと，集団全体として，一年間における療育実践を通しての集団形成をめざしての過程を，一応それぞれの時期として５期に区分することができたように思われる。いうまでもなく，それは単なる量的な区分ではなく，集団そのものの，むしろ質的なといってもよい変化に着目したものであり，その停滞あるいは展開，それぞれの様相を示した時期として，以下，次の５つの時期は，それぞれ，Ⅰ散乱期，Ⅱまとまり化期，Ⅲ行動化期，Ⅳ分散期，Ⅴ展開期，と名づけられた。それぞれの時期についての具体的な内容に関しては，「全体の動き」の章でのべられる。

Ⅱ　ＭＲＴグループにおける療育の実際

Ⅱ－１　療育における対象の子どもと担当者

本年度，ＭＲＴグループに参加した子どもの集団志向への動きを，その構成メンバーという面から考察するとき，次のようないくつかの大きな特徴がみられた。

1）子どもの年令差が大きく，３才～10才の幅に分布し，それ故に，年令的には，二つの群に分かれてしまった感がある。一つのグループとして構成することを意図するには，したがって当初はかなりの抵抗が見られたが，それらは療育の展開とともに，それ程気にならないほど，何かしら，この間の交流が自然に感じられるようにもなり，さらにそのことがかえってよい結果を招いたとみられた状況も，２，３にとどまらなかった。この年令差は集団療育を受けた経験年数差とも関係深いものであって，

表１　２者関係の確立を基盤としての集団志向への「歩みの段階」

段　階	内　　容
A）孤立段階	子どもはまったく孤立している。療育担当者に対しても，無関心あるいは無視，拒否といった形での関係しかなく，集団はおろか２者関係としてのつながりもみられない。
B）２者関係形成段階	泣いていても療育担当者が来ることで泣きやんだりして安心感が生まれるなど，療育担当者とのみつながりがみられる。そこには明らかに他の療育者に対するのとは異った関係がある。
C）集団志向段階	形成された療育担当者とのつながりを基盤に，さらにそれを単位として集団の中へ入り込むことを志向する。この状況で療育担当者もその担当児のみならず，他の子どもへの働きかけも可能となり，また担当者自身の動きも拡大される。
D）集団形成段階	療育担当者とのつながりが確立した上で，療育担当者以外の療育者ともつながりがみられるようになり，又他の子どもからの働きかけにも応ずるようなったりして，集団の中で子どもが安定してくる。
E）集団展開段階	療育担当者とのつながりにこだわることなく，子どもは集団の中の一員としてのびのびと動いている。さらにそうした子どもの存在が集団としての動きを生き生きと展開させる。

前年度，さらにはそれ以前からの継続療育の子どもたち（3名：内1名は途中で他施設への通園の為来所できなくなった）が年令的に高く（8～10才），本年度から参加の子どもたち（3名）が，幼児に対する早期療育を意図した私どもの受け入れの立場からして，比較的年令が低かった（3～4才）のは，ある意味で当然のことでもあった。

2）決して意図的ではなかったが，本年度療育の初期には，対象児はすべて男子であり，女子は後半になって1名参加したにとどまった。グループの雰囲気が全体として，活発で，動きの大きなものになっていったこととこのことは無縁ではないように思われる。

3）対象児の障害の種類に関しては，小頭症，ダウン症候群など，全体に精神発達遅滞が顕著で，また症状面では，自閉，テンカンを伴うものが含まれた。しかし，前から考察してきたように，ここで意図してきた療育の目標からすれば，障害の種類が，また症状が何であるかを問うことは，これまた無意味のように思われた。

4）年度の中で，対象児，また担当した療育者とも，やむを得ない事情にもとづき若干の変動がみられた。子どもの側では，年度途中でも施設，その他，定時保育の可能な場所が得られれば，積極的にそちらへ移籍を促進させたこと，また，交通の不便，子どもの高年令化，肥満化などの要因に伴ない，定期通所が困難になった子どもも出たことも重なって，療育の対象児が減ってきたという事実にかんがみ，集団療育を推進する立場からして，出来うる限りその都度補充をすすめるよう試みた。担当者の側においても，年度途中で都合により男子療育者が1人欠け，結果的に，対象児は男子ばかり，療育者は女子ばかりということにならざるを得ない時期も出てきた。偶然の結果でもあったが，それを補う意味においても新しい男子療育者がそのころ得られたのは，その点MRTグループ自体の療育にとって意義深いものとなったといえる。

5）療育者の障害児集団療育経験に関しては，多少の年数の違いはみられたが，一応，このグループへの参加以前に何らかの形での経験を持っていたものから成り，これまでまったくこれらの子どもたちと取り組んだ経験がないという者はいなかった。療育者同士は，MRTグループにおける子どもとの取り組み，さらにそれにつづく記録・討議の時間以外にもできるだけ日常的な生活の中で話し合いの場を設け，療育者自身が集団としてのまとまりをかためていこうという点では，常に一貫した姿勢を保つように努めてきた。

6）療育の当初において，一応，子どものひとりびとりに主としてかかわる療育担当者を設定した。このグループで志向するところのねらいからして究極，集団としての構成を，さらにその中での活動の活性化を意図するものであったとしても，障害児を対象とした療育である以上，当然こうした重い障害児にとって，最初の出会い，かかわりは，1対1の関係からしか始められないし，したがってまた，こうした2者関係の確立ということを，何よりもの基盤として，集団形成への方向をめざすことが，このグループにおける中核の課題であったからに他ならない。

以上のように，多少の出入りはやむを得なかったが，最終的に，本研究の対象児として，ひとりびとりの子どもがそれぞれの主たる療育担当者との関係の確立を基盤としての，集団化への志向の過程をどう展開したかの記録がまとめられたのは，初期の段階でグループを退いた1名を除く，以下5名の子どもについてである。

トモオ－昭和42年10月8日生（男子）主担当：浅田

昭和45年，自閉的傾向を主訴として，私どもの相談室を訪ね，当初は個別遊戯治療を行って来た。しかしその効果が顕著にみられなかったために，集団内におけるゆさぶりかけを期待して，昭和47年からこのグループに参加，集団療育をうけることになる。本年度の療育で4年目になるが，家が名古屋市郊外で遠いのと，年令の増加に伴い，肥満児的成長をみせ，その重量の故に，母親が伴っての通所が次第に困難となり，欠席が年度ごとに目立ってきた。今年度は特にその傾向が強く，全体34回の療育回数のうち出席は最終のおわかれ会を含め10回にしかすぎなかった。以下の記録もしたがって，他の子どもたちと同様のレベルでの考察を行うには，かなり無理があることを断っておきたい。

ヤスヒデ－昭和39年7月23日生（男子）主担当：山田

点頭てんかんをあわせ持ち，重度の精神発達遅滞の状態にある。4才～6才まで，母子通園施設へ通所，療育を受けていたが，就学年令に達し，同施設を退園，収容施設へ入れては，という話もあったが，親が「とても離せない」とのことで，その後在宅，一時その発作の症状などのためコロニーに入院したこともあった。療育者のひとりが本児を以前から知っており，どこへも行っていないのなら私どものグループに参加してはどうかということで，昭和49年4月より集団療育を受けることになり，本年度は2年目であった。少し視力が弱く，歩くときも慎重である。身体はかなり大きい。療育の状況では，いつも特定の療育者にベッタリとくっつき，一度気に入っ

てしまうと，いつまでもその人の後を追うという光景がみられた。なお昭和51年４月からは養護学校へ正式入校が決まって，現在，元気に登校しているとのことである。

コウジ－昭和45年12月20日生（男子）主担当：西尾

私どもの本年度のこの療育目標に適した子どもを，ということで，児童相談所から紹介してもらう。これ以前には集団療育の経験はない。ダウン氏症候群で，中度－重度の精神発達遅滞を示す。母親としては，教育・訓練（特に食事の自立）を希望していた。当初４才４カ月であったが，立つこともやっとであり，全体として〝赤ちゃん〟といった感じ。目がクリクリとし，マツ毛が長く，女の子のような可愛い感じであった。情緒的にもまだ未分化で泣くか笑うといった程度である。母子分離ができず，しばらく泣くばかりの時期が続いたが，それを乗り越えると，あとは着実な伸びを見せた。昭和51年度以後は，公立の通園施設へ入園が決まっていたが，転居の話も出ており，その後のことはまだ連絡のない状況である。

トシコ－昭和47年９月27日生（女子）主担当：浅田

昭和50年９月に，ことばが出ない，ききわけがなく危険なことをする，とのことで当所を訪れる。一卵性双生児の妹として生まれる。姉妹とも，胎生期も周生期も異常はなく，姉には現在においてもまったく問題はない。生後姉は主に母親の手で育てられ，本児は祖母の手で育てられたが，祖母は割と無口で，年令的にも本児と一緒に遊べる程元気ではなかったという。診断的には中度の精神発達遅滞といえる。当時，ＭＲＴグループでは，女子がいなかったこと，また，そのときの状況で集団の場を作る上に人手の面でも余裕があったこともあって，積極的にこの子を受けとめることになった。本児もこれ以前に，集団療育の経験はない。物理的にも，生育史の上で，母親からの疎外状況がこれまで顕著であったことから，母親に対する助言，指導を特に強力に行った。なお，51年度も継続して集団療育をこころみるつもりである。

タツオ－昭和47年１月13日生（男子）主担当：大角

昭和50年７月，コウジの母親の紹介で来所。このふたりは，家も近く，又，同じダウン氏症候群であるとのことから，母親同士は以前から時々話し合っていたとのことであった。前々から来所の希望があったが，受け入れ態勢の問題から待ってもらっていた。その後，その問題も解消され，かつ，ＭＲＴグループにおいて，運動能力の格差をうめてくれるような子どもが欲しいとの条件にもかなって，９月以降正式に参加することになった。集団療育の体験は始めてにもかかわらず，他の子どもとくらべ集団における適応は早く，活発に動きまわり，このＭＲＴグループにおける集団の成長には，なくてはならぬ存在となってきた。ときに集団が停滞したときも，それを乗り越えて成長していけるだけの力をすでに貯えており，その意味でも本児の参加は，このグループの療育の活動に意義づけを強めたし，またその集団からの力を自分の成長にもっとも活用した子どもであったともいえる。年令もまだ幼いことから，今後も継続して集団療育をすることになっている。

Ⅱ－２　療育における日常スケジュールとその記録

開始・終了の時間の都合により，食事をどこにはさむかに大きな違いがみられた以外には，日常の療育スケジュールは原則として，ＭＲＷグループにおけると同じように定められ，すすめられた。具体的なスケジュールは次にかかげるとおりである。

表２　療育のスケジュール

A.M. 11：30	担当者の集合 その日の日程の打ち合わせ
P.M. 0：00	はじめのつどい 設定課題（集団遊び・体操）
0：30	自由課題Ⅰ（主として室内での自由遊び）
1：00	食事の訓練とその介助
1：40	自由課題Ⅱ（主として戸外での自由遊び，集団活動）
2：20	おわりのつどい（集団遊び，連絡ノートの記入）
2：30	解散（おわりのあいさつ）

療育をおえてからの記録と討議のありかたについても基本的にはＭＲＷグループのものとかわりはなく，本報告（そのⅠ）のその項を参照してほしい。ただＭＲＴグループの場合においては，そこでのねらいからして当然，私どもは常に２者関係の確立ということを意識的に強調し，それを基盤としての集団形成という視点が討議の中心となり，その療育状況１回１回の記録もその線に即してまとめられたことだけを付記しておきたい。

Ⅲ　ひとりびとりの集団化への動き

Ⅲ－１　トモオの動き

かなり長い間このグループに，休みは多いながら加わってきたトモオは，今年の担当療育者とも比較的早い時

点からふたり一緒でならなんとか集団へ加われるようになっていながらも，6月以降，この年もまた事情やむを得ないにしろ欠席をくり返すごとに，せっかく集団参加への方向づけがみられたその状況が，すぐまた後退してしまうのである。

結局この一年を今こうしてふり返ってみると，トモオの行動の大部分は，1対1での療育担当者，浅田との関係を保てるか否かの段階にとどまってしまい，集団への参加という点ではほとんどその成果は得られなかったといわざるを得ない。4回目，5回目，この2回が段階C：集団志向にと方向づけられたのは一体何であったのだろうか。この1年，何もしなかった，何もなし得なかったというのはいいすぎであるとしても，やはりむなしいかかわりに終始したというべきであろう。しかし，それなりにトモオ自身が，私たちとの関係でたどってきた経過だけは，ここに残しておきたい。

もともと出席した回数が，1年間で最後のお別れ会を含めてたかだか10回にしかすぎない。したがって，これを，他の子どもの場合と同じように1年の流れを追って段階的に，集団参加へのプロセスとして位置づけていくことはまったく不可能である。療育担当者としての浅田自身，トモオとのかかわりの体験をその都度報告していくにとどまったのはこの故であることを始めにおことわりしておきたい。

初めてトモオに会った時，トモオの体の大きさに一瞬ドキッとしたことから始まって，その表情の乏しい顔，人を避け，部屋に入ってもすぐ隅の方へ行こうとし，オドオドと不安気な落ちつきのない様子に，どう応じたらいいのかとためらってしまった担当者，浅田であった。困ったなというより，今，まずどうしたらいいのか，それがなんともわからなかったのである。つながっていけるだろうかという不安は大きかった。でも，あせらない，ゆっくり行こうと思いつつ，2回目に，先回同様ポツンとひとりでいるトモオと遊びで接近してみようとした。トモオが片時も離さないお気に入りの品である，しっかりにぎりしめた手の中の紐の片端を浅田も持って，ふたりで振ったり，先にタンブリンをつけてゆらせたり，そんなちょっとした遊びのくり返しのなかで次第にトモオの表情はやわらいできた。散歩の後では疲れたのか，一緒にすわって頬をさすってやっているうちにペタンと浅田にもたれ，甘えてくるような感じがあった。まずかかわりは始まった，そんな思いの2回目の療育だった。3回目はお休み。次の4回，5回は出席，この両回とも，2回目をうけてかなりに集団の中にはいっていけた。1回目では嫌った多勢の人や室内のざわめきも，このときはそれほど気にならぬかのようにニコニコ笑ってトランポリンで跳ねるトモオ。この調子なら，トモオの遊びの種類をひろげたり，私ども療育者との関係ばかりではなく，他の子どもたちともかかわれるかと期待が抱けたのだが，残念，またこれまでの毎年の状況と同様，トモオのグループへの参加は継続されなくなってしまったのである。以来まず，6～9回まで1カ月半が休みとなり，以後欠席はくり返され後半の10カ月の間に参加はわずか6回と，平均しても月1回も参加できない状況であった。そのために，トモオにとっても療育担当者にとっても，久方ぶりの参加の場で顔を合すごとに，また初めから新しく関係をつくりなおさねばならず，かかわりの積みあげとはきわめて遠いものになり，結果としては次第にふたりの距離は離れていくことになってしまった。それでも9月から10月末までの2カ月間に4回と比較的密度濃く参加がなされた時点では，トモオと浅田とはつながりあい，互いにかかわりあうこともできていたのだが……。やはり，継続して参加することの意味を今しみじみと思う。大きなトモオをギュッとだきあげて「地球をドンドン」の体操に参加したとき（9回）も，つい人の居ない第2プレイルームへ行ってしまうトモオに「第1だよ―」と大きな声で呼びかけたとき（10回）も，療育担当者の方からもふみこんで，つっこんでいこうと思い切れた場面だと思う。やはり連続して参加してくれるとこちらも思い切ってトモオとぶっつかり，こんな方法はどうかと，

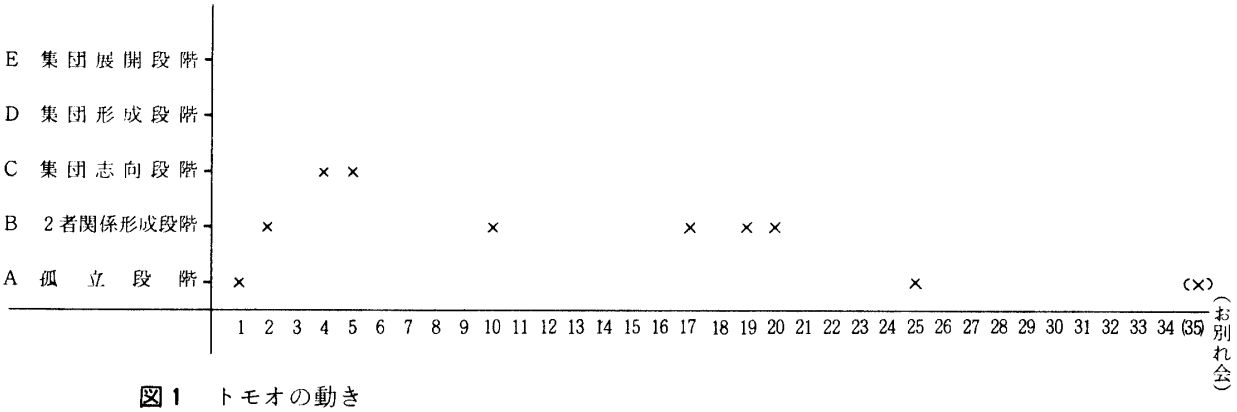

図1　トモオの動き

あれこれ試みるゆとりが持てるのだが，休みが続いた後ではどうしても，「いいのかな？」とためらう思いが先にたち，担当者自身十分トモオに働きかけられない原因となってしまう。こんな気持は，トモオにとっても多分同じように伝わるのだろう。これではまずい，「ともかく来て欲しい，続けて来てくれたらもっと何かが生まれるのではないか」と，20回目の記録には記されている。

しかし，こうしたためらいと迷いとの時期を越えて，さらに１歩踏みこんで前進することのできないまま，11月に行なったこのグループでの前半まとめの合宿討議の際には，「トモオの療育は今年度で終了を考えた方がよいのではないか」との提案がなされる結果になった。こうして十分な療育のできないまま，形の上だけこのグループに所属することによって，親の方も安易なよりかかりをもったままでいるよりは，トモオの将来を本当に考えてみるならば，ここ以外の公共の福祉機関での療育を求めるため，さらに一層積極的な働きかけをすすめることが必要であるという判断だった。

トモオは，冬期という条件の悪さもあり，その後も欠席を続けていたが，久々に出席した25回には担当者，浅田がたまたま都合で欠席したこともあって，展開はもちろんみられず，結局すれちがいのまま，最終回，お別れ会となってしまった。このままで終ってしまうのかとなにか済まされぬ思いを感じつつ，トモオを迎えたのだが，いっそう体は重くなったようで，今まで以上に人を恐れ，会の終りまでトモオを部屋の中に留めることすら困難だった。狭い室内に，一番初期のこの療育グループの経験者たちも含めて50名ほどが集まっていたことも原因してはいるのだろうが，落ちつけないトモオの様子を見ていると，トモオの療育担当者として何もしてやれなかったことが本当につらかった。ただ，「帰りたい」といった様子でひとり玄関口に出ていたトモオの手を，ヤスヒデがギュッとにぎって，「おいでよ」といわんばかりに引っぱると，その強さに押されたように，ふたたびトモオが室内にもどったことが一度あった。その様子をみて，このふたりがかかわりあってきた今までの経験は，浅いかかわりにとどまっていたにしろ，それなりに意味あるものだったことを心から知らされた思いだった。それと同時に，療育担当者の中に深い反省の思いがわきおこった。「おいでよ」と引っぱったヤスヒデのあの強さ，それが自分には欠けていたのではないか，ためらいつつ，トモオの側に立っていただけでしかなかった自分，済まされぬ思いが残ったのはそのためだったのだろう。トモオと思いきりぶっつかりあえなかった原因を，参加意欲の弱さにかえてしまっていたのではないだろうか，常に停滞したままでいたある種のためらいを越えて，浅田自身もっともっと本気で残された時間，機会にぶつかっていくべきではなかっただろうか。今また，こうして反省している療育担当者である。

＜まとめ＞

トモオとのかかわりを通して，かかわりを積みあげるためには，まず何よりも連続して参加することが大切なのだと教えられた。この点からして，たとえ事情はいろいろ厳しいにしろ，トモオが今すこし積極的に療育の場へ参加するよう，母親も今一歩努力してくれていたら，という気持が残ることは否定できない。

しかし，一方こうしたトモオの連続参加のできなさも含めた多くの点に対して，私たち療育者の側でこれという積極的な援助のできなかった状況は，なおも自戒し批判しあっていかなければならない。それはたとえ，なんとかしたいという気持のみではどうにもならない問題として，このグループ自体の限界と考えざるを得なかったにしろ。

このグループからトモオが去ってしまった今は，せめて，これからのトモオの生活の場でよりよい療育の機会が得られるよう，ただ願うのみである。

Ⅲ－２　ヤスヒデの動き

１）関係固執期（１回～14回）

この時期のヤスヒデは，もっぱら担当療育者との関係の中で動き，それを楽しんでいるようだった。そして，反面では，その関係での結びつきがあまりにも強すぎたが故に，集団の中に入り切れずにいることの多い時期であった。

ヤスヒデと療育担当者としての山田との最初の出会いは，本年度の療育に先立つ半年前，49年10月であったが，その出会いの瞬間からヤスヒデからの一方的ともいえる積極的なはたらきかけと，強い甘えによる「ベッタリ」した関係がきずかれてきたのである。今年度の療育が始まる時点においてもその関係は変わることなくそのままで，さらにこの後，夏を過ぎるまで続いたのである。

こうしたあまりにも強すぎるベッタリの２者関係のために，ヤスヒデは担当者以外のセラピストと関係をもつことができにくく，しかも，当初，この療育グループそのものがまだまだ個々の２者関係の中で動いており，集団としてはとてもまとまることができず，まったく，バラバラの段階であったために，ヤスヒデの担当者，山田に対する甘えはいやが上にも強まる一方であった。

ヤスヒデの遊びの範囲はかなり限られたものであり，トランポリン，砂遊び，水遊び等，体を使っての遊びが多かった。おもちゃへの関心はうすく，たとえ関心を示しても自分自らおもちゃを使うことはなく，担当者に使

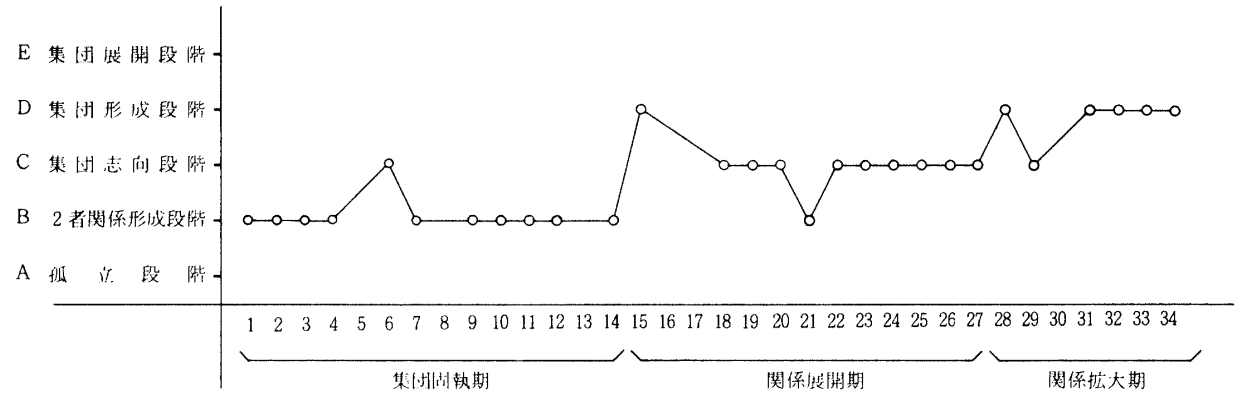

図2　ヤスヒデの動き

わせることの多いヤスヒデであった。

やがて，7月に入ると，新しい子どもの参加とともに，このグループが集団としてのまとまりを見せ始めるようになり，「手をつなごう」「ピンポンパン体操」等のリズム遊びを通して集団としての行動をとることも多くなるのであるが，そうした集団行動からは，どうしてもはみ出すことの多いヤスヒデであった。山田が積極的にこの種のリズム遊び等に誘いこんでも，のってくることはほとんどなく，またすぐひとりトランポリンや砂場にもどってしまうことも多かった。もともとプレイルームで皆一緒にいるときでも，ともすれば担当者をうながして，戸外へ出るよう誘いかけるそぶりが目立つヤスヒデだった。

この頃はヤスヒデの行動の多くが，担当セラピストとしての山田とのつながりの中でなされ，〝みんなで楽しく〟というよりも，〝自分の担当者とともに楽しく〟といった感じの強いヤスヒデであった。そして，彼が山田との関係に固執しすぎて，そのために対人関係が狭くなり，行動が限られてしまうことが問題として，討議の折にいつもとり上げられた時期でもあった。

とはいっても，他の子どもに対するヤスヒデの関心は決して弱いものではなく，体に触れられたり，いっしょに遊ぼうとしたり，彼からの働きかけがかなり積極的にみられはした。しかし，残念ながら，ヤスヒデと他の子どもたちとの間には，年令的，体力的に大きなギャップがあり，彼からのはたらきかけを十分に受けとめてくれる子どもはこのグループの中にはいなかった。このことが，特定の担当者とのつながりの強化に一段と拍車をかけたものとみられないこともない。

ただ，本年度療育の初期の段階でも，第6回のみは，そうしたギャップをのり越えて，ヤスヒデも他の子どもたちも，ひとつになって楽しむことができた唯一のめだったよい日だったと思われる。箱車に子どもたちを全員乗せ，療育者たちが皆でそれを引っぱり，おとなも子どもも，大はしゃぎをした日であった。ヤスヒデは療育担当者としての山田とのかかわりにとらわれることなく，子どもたちの中で歓声をあげ，まさに〝みんなで楽しく〟すごし得たのであった。偶然ともいえるできごとではあったが，この日は単にこのヤスヒデ一人にとってよい日であったばかりでなく，このグループ全体にとっても集団としての展開へのきっかけが初めて芽生えてきたともいえる，忘れられない印象を残した日であった。

しかし，せっかく集団への萌芽が示されても，こうした状況は，これ以後ふたたびつくり出すことは困難であった。療育担当者との独自の2者関係を断ち切るほどの強い魅力ある集団状況を，この日を契機として積極的につくり出してやることができなかったことについて，担当者として強く反省せずにはおられない。

ヤスヒデとの間では，これ以後も秋まで「ベッタリ」としたつながりのみを中心としての関係が続くが，一方この療育グループ全体として行動化の時期に入り，療育者が一団のグループとなり，子どもたち全体とかかわっていこうとする方向をめざして皆で行動する機会が増えてきた。グリーンベルトへの散歩も始まり，この期間は，ヤスヒデにとってはその解放的な雰囲気の中で次の段階への下準備といってもよい時期であったといえる。

2）関係展開期（15回〜27回）

この時期は，それまでの担当者，山田との「ベッタリ」関係がそれなりに落ちつきをみせ始めるとともに，ヤスヒデがその担当者とのみでなく，他者との関係をも含めて集団の中に入り，〝みんなで楽しく〟という雰囲気を理解し始めた時期といえる。

9月に入り，このグループが集団として行動する可能性が出てきて，戸外への散歩など，解放的な雰囲気がかもし出され，他の療育者との接触の機会も次第に増えるとともに，担当者，山田とのみの関係が少しづつではあるが変化を示し始めるようになった。ヤスヒデの山田自身に対する甘え方は，以前のような「ベッタリ」一辺倒であった状況から多少は落ちついた感じになり，他の療育者と共にいることもかなり増えていった。

また，それまでは形の上では拒否していたとみられる皆とのリズム遊びなどにも，次第に担当者からの誘いに応ずるようになり，音楽にあわせて体を動かすことの喜び，そして単に物理的に集団の中にいるというだけでなく，〝みんなで楽しく〟ということの喜びが，わかってきたようにみられた。

おもちゃに寄せる関心も，この頃から少しづつではあるがみられ始め，それまで自分では使わず，他人に使わせていたおもちゃを，自分自身で使うようにもなった。また，家庭でも排泄の失敗がほとんどなくなり，たとえ失敗があっても，その不快感がわかるようになったりするなど，彼なりの成長がみられた。

その後，11月に入り，このグループが全体としてふたたび分散の方向に向うにつれて，グリーンベルトへの散歩の時など，ふたたび担当者，山田とのみですごす機会が多くなったが，こんな時，しきりと，バスを追い求めるヤスヒデの姿が目立つようになった。もともと車の好きなヤスヒデではあったが，それは，このグループの中ではヤスヒデと対等な立場で相手をしてくれる子どもがいないことの淋しさから，真実の仲間を求めて叫んでいる姿のようにも思われた。事実この年，療育グループでの遠足の日，同じ公園に，やはり遠足に来ていた小学生たちの後を，自分が敬遠されていることも知らずに，喜々として追いまわしていたヤスヒデ，その時の彼の姿には，もはや担当者として山田などの眼中に入らず，自分が関心をよせる，あるいは真の仲間となるかもしれない子どもたちとのかかわりのみをしきりと求め，ただ彼らに囲まれ，彼らにすがっているというだけで，満足しているヤスヒデの姿がそこにあった。

こうしたヤスヒデの，仲間となるべき他の子どもへの関心，働きかけを，十分満たしてやることもできないままに，この療育グループはいろいろの事情も重なって，一時停滞に入ってゆくが，この時期こそはむしろヤスヒデにとって大きな変化を起こしつつある重要な時期なのであった。

すなわち，12月に入り，担当者である山田自身，個人的な事情により欠席することが多くなったこと，新しいスタッフとして男性の療育者，永川がこのグループに加わったことが，それまでの山田との強固な２者関係に大きな変化をもたらしたのである。

具体的にいうならば，24回から27回にかけて，療育担当者，山田の一回おきに欠席することがやむなく生じ，そんな時のヤスヒデは，はじめのうちやはり落ちつきなくひとりでふさぎこんだりすることもみられはしたが，それでもその日の後半になると，新しい男性療育者，永川との遊びを楽しむことができるようになっていった。もっとも山田自身がグループに参加できた日には，以前のつながりにもとづく２者関係が復活するのだが，この不参加が続くことによって，新しい男性療育者とのかかわりが多くなるにつれ，初めには単に今までの担当者の代理としての位置づけしかなかったこの新しい担当者，永川の存在が次第にヤスヒデの中で大きな位置を占めるようになっていくのである。

３）関係拡大期（28回〜34回）

この時期に入ると，最初からの担当者としての山田との関係はもはや第１期にみられたような「ベッタリ」一辺倒といったものではなくなっていった。山田とふたりだけでいる時でもそのつながり方，かかわり方に余裕のようなものがみられ，ヤスヒデも以前のような一方的にしがみつくといった甘え方はしなくなっていた。

そして，一方では新しい担当者，永川とのかかわりがさらに深められ，ヤスヒデにとっての療育者の存在はかなり根をおろした意味あるものになっていったように思われる。第31回以降においては，それまでの担当者，山田がいるいないにはあまり関係がなく，この新しい男性担当者，永川とのかかわりがごく自然な形でもてるようになり，そのかかわりを楽しんでいるような雰囲気が外からも読み取れるようになっていった。さらにかかわりは深まって，それ以外にも広く，その他の療育者との接触も増え，こうしてヤスヒデと他者とのつながりはかなり巾の広いものになっていったのである。

また集団としてのまとまった行動が展開するときも，そこからはみ出ることが次第にすくなくなり，リズム遊びなども音楽が鳴りだすと，ヤスヒデ自ら，療育者に対して誘いかけるような行動も一層目立ち始め，〝みんなで楽しく〟過すことに喜びを示すといった感じがよみとれるようになっていった。

遊びの仕方でも，新しい担当者，永川とのかかわりにより，動きの多い活発なものとなり，おもちゃへの関心もさらに強まり，範囲が広がっていった。プラレール，救急車など，今まで無関心であったおもちゃに対しても喜びを示すようになり，車が走るのを追ったりする姿もまた，目立ってみられるようになってきた。

家庭でも，行動にまとまりができ，落ちつきがみられるようになったとのことである。排泄を知らせることができるようになったり，絵本を見るようになったり，このところ一段と成長発達が形としてあらわれてくるようになった。

他の子どもとの関係では，このグループの子どもたちの年令構成に問題もあって，あいかわらずヤスヒデ自身からのはたらきかけが受けとめられることは少ないが，〝お兄ちゃん〟としての立場に立ってのいたわりといっ

た動きがみられ，この時期に入って，世界が大きく広がり始めたといってよいヤスヒデであった。

＜まとめ＞

この療育グループにおけるヤスヒデの一年間の生活は，集団への参加プロセスとしての発展としては結局十分ではなく，結果的にはどうしても，担当者との2者関係の展開でのプロセスにとどまったと思われる。

ヤスヒデにとって，このグループは，集団へ参加していく過程といった意味づけからはそれほど大きな意味をもち得なかったといえる。ヤスヒデは，もっぱら担当者としての山田，又はそれ以外の療育者との2者関係の中で動き，その関係が初めには担当者としての山田への固執にとどまっていた段階から，次第に展開し，少しずつ他の療育者へも拡大されていったといえよう。

新たに，今年度4月からは，念願の養護学校に入ることができた。ヤスヒデの世界はここで一段と大きく拡大されていくことが期待される。ヤスヒデがあんなにも求めていたにもかかわらず，私どもの療育の場では十分に得られなかった子どもとのかかわりも，そこでは進展していけるであろうことを今は願う次第である。

Ⅲ－3　コウジの動き

1）孤立期（1回～3回）

この時期は，コウジにとって，設定課題を母親との分離から集団適応へ向上させる為の基礎づくりの期間であった。

母親からの話では，家では激しく泣いたことなどまずないというコウジが，第1回目のこの状況では，集団場面を徹底的に拒否し，身体全体で激しく泣き続けた。コウジにとって初めてといえる集団，自分がメンバーとして所属することが認められた集団を拒否することによって，集団を意識した時期ともいえる。

具体的に療育場面におけるコウジは，彼1人か，彼と療育担当者，西尾とふたりだけで集団の外（室外）に居れば，なんとか落ち着くことができるが，たとえ西尾が抱いたままであっても，皆が居るところに入室すると叫ばんばかりに泣き続けた。2回目は慣れないためと泣き疲れから，療育時間の半分以上も眠ってしまう状態であった。しかし，室外でのコウジと担当者との関係では母親との分離不安もなく，スムーズに接近していった（コウジが母親の認知をなし得ていたのかということについては不明）。担当者，西尾の腕時計に特に興味を示し，長時間にぎりしめていたり，しゃぶったりしていた。コウジにとって，担当者，西尾を認知することは，時計という，コウジが十分にとり込める小道具によってなされつつあったように思われる。コウジの行動範囲もきわめて狭く，西尾のひざの上とその周囲30cm程の所にしかすぎなかった。

こうしてコウジと担当者だけの世界に終始し，集団から孤立することによって，集団を意識することがはじまった。

2）集団志向期（4回～11回）

コウジにとって，集団の中で安定するための基礎作りの期間といえる。集団を拒否していたコウジが，担当者と一緒に集団場面に物理的に居ることが可能となったのである。この時期の最初，4回から7回にかけて，時として不適応を起こし，泣く場面もあったが，そのときでも担当者，西尾の顔をチラリ，チラリとうかがっては泣いているといった甘えが出始め，よりコウジと担当者とが接近すると同時に，集団参加を感じさせる落ち着きを示していた。

具体的には，夏期に入り，戸外での集団場面が多くなり，西尾がコウジを連れているという形の時間が増加し，担当者と一緒に居る時の表情が次第に分化されるようになり，コウジなりの成長が感じられてきた。

このようにして，特に8回以降は，最初あれほどまでに集団を拒否していたことが信じられないくらいの落ち着きをみせていった。このことは，身体発達レベルが比較的近いタツオのこのグループへの参加が一つの大きなきっかけになったとも思われる。

食事の自立に関しても，全介助からスタートしたにもかかわらず，食べ物への関心が強かったことも幸いして，集団の中で楽しく食べることができるようになってきた。この子なりに自立への可能性を感じさせる時期でもあった。

3）変動期（12回～21回）

図3を見てもわかるように，集団志向への「歩み」の段階でAとCの間を行き来していることがはっきりしている。この期間はこのグループ全体が集団志向という形で一歩一歩進んだ時期でもあった。しかし，集団の動きがより活発なものとなっていった反面，やむを得ないいろいろな事情から療育者側の人手不足といった問題が生じてきた。

毎回，散歩に出かける所の周囲にはかなり危険な場所があっただけに，散歩時間の間じゅう走りまわる子供や，身体の大きな子供を動かすには常に療育担当者以外にも人手が必要になってきた時期でもあったが，こうした状況の中で，コウジ1人は行動範囲がきわめて狭く，そうした心配の一番少ない子供であった。したがって，担当者は他の子どものために人手が必要となるとすぐ，コウジをひとりだけにして走って行くことが多くなり，その結果動きの乏しいコウジが，ポツンとひとりで居ること

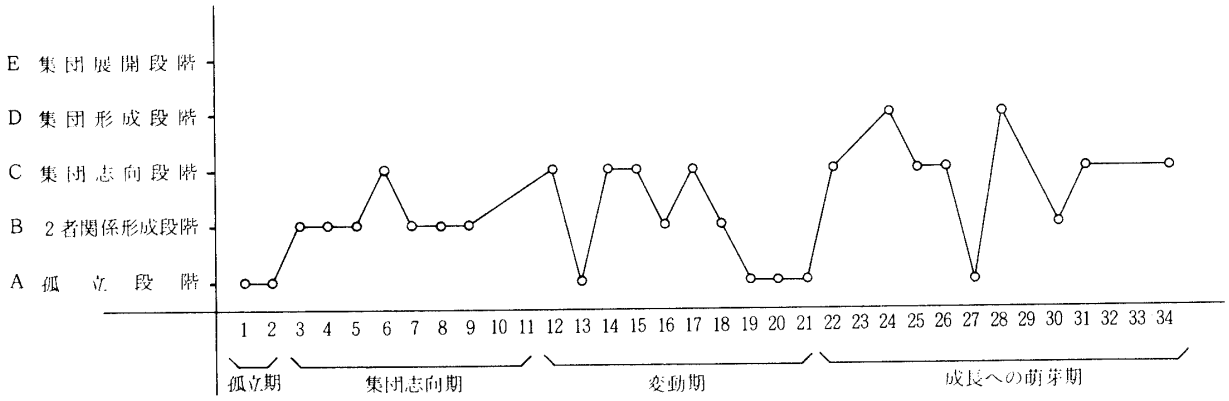

図３　コウジの動き

が目立つようになった。コウジにとって，他の療育者からの働きかけを拒否することなく，反応するようになっていたが，自ら働きかけることは不可能ではないにしろ，いぜんかなり難しいことであった。

この期間のコウジをみてみると，療育者たちが集団志向に向っていけばいくほど，それとは反対に上記の理由から取り残されることが多かった。しかし，コウジと担当者である西尾とが一緒になって集団場面に加わっていけば，十分に参加でき，時には集団の中でかなり適応した動きをすすめていくことも可能になっていた時期でもあった。

担当者，西尾が積極的に働きかければ，段階はＣになり，他の子との関係で忙しさにまぎれていると，コウジは忘れられて段階Ａに落ち込むといった繰り返しがみられた時期だといえる。

４）成長への萌芽期（22回〜34回）

療育者側が，秋にこれまでをふり返って，この子の動き等について合宿討論をした直後でもあり，月間目標を設定し，計画的な療育を目指してより積極的にかかわろうと意図したためもあって，時には段階Ｄに行くこともみられた期間である。前のようなこの子の動きからふたたび段階Ａに落ちこむこともなくなかったが，コウジにとっては，集団参加に一層向っていった時期といえる。

グループ全体としては，療育者の方にも新しい仲間が加入し，集団としての動きがひとまわり大きくなったとみられる時期でもあった。

設定課題としてかかげた食事の自立は完成間近となり，新たに歩行訓練を目標とした。コウジの行動範囲を広げることは，興味を拡げることにも通じると考え，まず歩行を確かなものにすることによって，コウジの世界を拡げようと意図したのである。これと同時にコウジの発声が目立つようになったことに注目し，発声の楽しさを味あわせることもこの時期における課題とした。

冬期に入り，散歩も全員一緒に出かけることが減り，室内ではどうしてもふたたび療育担当者と子どもを単位として動くことが多くなった。しかし，そこでも「地球をドンドン」などのリズム遊びへ，コウジ自身自発的に参加することも時にはみられるようになっていた。

そうはいっても，コウジは相変らず対人関係一般という点では，自分から他の療育者や子どもに働きかけることはほとんどないし，他からの働きかけに反応することもきわめて少ない状態がなおも続いていたといわざるを得ない。〝集団に慣れる〟ところまでは十分に発達することができたと思われるコウジも，こうした対人関係という点でのかかわり合いなどになると，かなり難しくなるという壁につき当っているとみるのが正しいであろう。この時期をあえて成長への萌芽期としたのは，自ら意識するということは無くとも，いつの間にか，ゆるぎないメンバーの一員としての〝場〟が集団の中に位置づけられ，たとえ歩みは遅くとも，コウジはコウジなりに集団としての動きの中に入りこんでいくことによって，一段と成長していくであろう芽を感じさせていったと思われたからである。

＜まとめ＞

１年間，コウジと接してきて，今一番思うことは，自発的な働きかけの少ないコウジに対して，どこまでかかわることができたのかという，担当者としての西尾が自分自身に対する問いかけである。段階ＡからＢまではスムーズな成長を示したコウジも，段階Ｃ，段階Ｄとなると現時点ではどうしても限界を感じさせられる事が多々あった。じっくりかかわろうと思いつつも，コウジの反応の少なさにこちらがジレンマをおこしたことも決して少なくない。しかし，そうはいっても，他の子どものＣ，Ｄ段階とは多少異なったニュアンスながら，コウジなりにその段階に達したとみられる場合のあったこともまた事実である。

どのようなささいな動きにも成長の芽を感じ，子どもも療育者も共に伸びていくことを目指した私どものこのグループである。この１年間の経験がコウジにとって，はたしてどれだけの成果として揚言できるかどうか断定

はできない。しかし，少くとも集団の中で安定感を得てきたのは確かだと思う。他者との関係を基盤として成長することが，人間の発達で何よりも基調となるものであるだけに，コウジにとってこの1年は何よりも大きな経験であったといってよいと思われる。

Ⅲ－4　トシコの動き

1）2者関係形成期（18回～21回）

トシコがこのグループに参加して来たのは，秋も初めの10月，皆でよく豊田講堂前の芝庭へ散歩に行くようになった時期だった。トシコは，食事や身辺のことはすこし介助してやればなんとかできたけれども，ことばが無く，固い表情で，眼の焦点が定まらないなど，情緒面での障害が重く，皆と一緒にいてもやたらと動きまわり，車道へもかまわずひとりでとび出てしまうなど，片時も眼を離せない存在だった。とにかく療育担当者としての浅田ひとりでは追いかけきれず，毎日トシコがとび出るたびごとに他の療育者にも助けてもらわなければならなかった。集団などというものはまるで眼中に無い感じのトシコ，でも，だき上げてやると固い表情が一瞬，ニコッといっぱいの笑顔に変わり，今嬉しいんだなとその気持が担当者にも伝わる，そんな状況からふたりの関係は始まった。初めには一体どこを見ているのかはっきりしなかったトシコの眼の動きが浅田なりにつかめるようになったり，ひとりで遊ぶトシコの横から何とか浅田も手を出せるようになったりするなど，ふたりの関係はそれなりに進展してはいったが，逆にこうしたふたりの結びつきは，散歩の時などで集団行動をとるよりも，トシコの興味を優先させる配慮へとむかい，つい集団の動きからは遠ざける結果となってしまった点は否めない。

2）集団志向期（22回～28回）

しかし，こうした形で2者関係がかなり安定してくると，トシコの笑顔は今までより一層多くまた，長く続くようになった。また，今まではただあてもなく方向性もなく，動きまわるのみだったのに，24回〝ペタリ〟と療育担当者，浅田にくっついてきた後は，しばらくの間，以前にくらべるとはるかに動きの静かな回が続いた。療育担当者である浅田が都合で参加できなかった25回では，まだ他の療育者とかかわっていくことができないで，段階Bに落ちこんだが，しかしそれまではひとり室外を走りまわることにのみ集中していたトシコの興味が，室内のおもちゃにも向き始めるようになり，集団の雰囲気にもわずかながらではあるが溶けこんで動けるようになってきたことが感じられている。

3）集団形成期（29回～34回）

トシコが自分から集団の動きに参加してきたとはっきり感じとれたのは29回だった。リズム遊びで「地球をドンドン」をやった時，ほんの少しだけど初めて皆の動きに乗ってトシコの方から動くのがみられた。ようやく集団にはいってきた感じ，これからはできるだけそんな機会を多く作っていきたいと思う。その一方でまだまだトシコの興味に合わせ，担当者，浅田とふたりだけで動くことの必要性，そして，それを基盤として次第に集団に参加し，自由に皆と一緒に動けるようにしてやらねばという思い，その両方が同じ位に大切なように思われた。固い表情でときに笑うことはあっても，「それダメッ」と強く他者から押えられても，怒ったり泣いたりするような情緒表出を知らず，同じ表情のままで2度，3度と常同的ともいえるように前の行動をくり返すだけのトシコの様子からは，知的遅滞と情緒的障害とが不可分に併存していると考えられた。そうしたことを配慮するとき，食事やリズム遊びの時などで皆と行動を一緒にする一方，散歩の時などでは，ただ無理にひっぱって歩くだけでなく，トシコが興味をもっている階段登りや砂遊び，ゴミひろいなどを担当者，浅田とふたりでするといった動きをとるよう努力することが必要に思われた。そうしたなかで，他の療育者からの働きかけにも応じての動きがぽつぽつみられるようになり，どの療育者とでも安定したかかわりがもてるような動きの萌芽を感じさせられた。また，集団に合わせた行動は，あの「地球をドンドン」

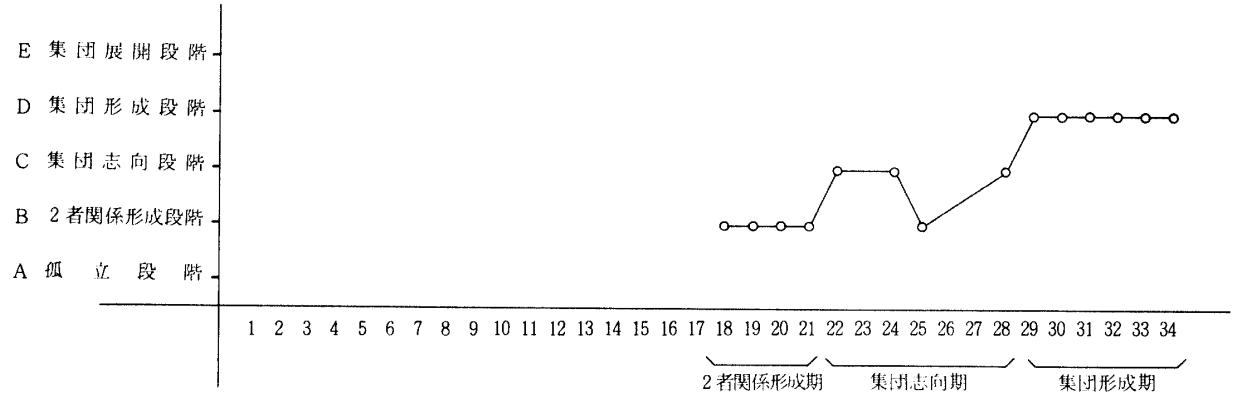

図4　トシコの動き

以外にもみられるようになってきた。たとえば29回から食事のときにはちゃんと，自分の場所へ自分のお弁当を持っていって座れるようになり，30回からは，さようならのあいさつ代りの「手をつなごう」の遊戯の輪にも加わることができ始めている。さらに，情緒的な表出という面でも，時に応じて怒ったり，泣いたりするようになった。昼食事には他の子どもより早く自分の席に座るのだが，皆で一緒にいただきますをするまで，なかなか待っていられない。32回の時，早くも弁当に手をつけようとするトシコを，浅田が「まだょ！」と押えると，怒って大声で「アーアー」と抗議した。また，33回には近くの児童福祉センターにある大好きな長い滑り台で，十分遊びきれないまま帰る時間となったとき，帰りの自動車の中で，もっと遊びたいという感じをこめて，ずっと泣き続けるという行動もみられた。ようやく泣けるようになったトシコ，そう思うと思わず拍手したい気持になった。このように多くの進歩が認められた反面，他の子どもたちからの働きかけを受けることはあっても，最後までトシコ自身から積極的に他の子へ働きかける動きまでにはなかなか到らなかった。グループの中でただひとりの女の子でもあり，タツオやヤスヒデたちが，よく一緒につきあおうとしてくれたのだが，こうした集団内での動きの展開にまで進めなかったのはやはり担当者にとっては淋しい思いが残る。あと１年ひき続いてこのグループに参加することに決まったトシコにとって，これは残された課題といってよい。

＜まとめ＞

トシコの場合，一番印象的だったのは，何よりも表情の変化だったと思われる。どことなく暗く固かった表情が次第にほぐれ，笑い，怒り，泣けるまで，10月にこのグループに参加してからわずか５カ月といった比較的短い期間ではありながら，着実に成長してくれたことを感じとれる。ここでの主題である集団への志向のプロセスにしても，段階ＢからＣ，Ｄへとかなりスムーズに展開していくのがみられた。こうした動きに対応して，家庭でのトシコの変化も大きいことを母親からきいている。

集団にひっぱられ，助けられて成長したこの半年だった。次の年度，またひき続いて療育を受けられるだけに，今度はより展開して積極的に，集団をひっぱる側として成長していってくれることを心から期待したいと思っている。

Ⅲ－５　タツオの動き

１）孤立期（８回～11回）

タツオは，この療育に参加した当初から，エネルギーに満ちあふれた子にみえた。まだしっかりしていない足どりながら，あっちへこっちへと行ったり来たりし，プールを見るとそのまますぐに入ろうとした。その姿からは，タツオがこれからぐんぐん成長する様子が容易に想像できた。

しかし，そんなタツオもそれからしばらくすると，あたりを見まわしながら泣き始めた。母親を捜し求めているらしい。療育担当者，大角が，抱いたり，揺ったり，遊んだり，何をしても泣きやまないし，お昼のお弁当も全然食べなかった。そして，ますますひどく泣くタツオに対し，大角はどうしたらよいのかわからず，泣きながら眠ってしまったこの子を抱いて，自分も半泣きになって廊下で寝ころんでいた。

この期でのタツオは，療育の間一度も排泄をせず，お弁当もまったくといっていいほど食べなかった。少し大げさな表現ではあるが，いわば完全拒否状態にあったということもできよう。

そこで，担当者，大角としては，まず第一歩として，タツオに対し，ともかくこのグループに慣れていくこと，少しでも，何かを食べるようになることを当面の目標におくことにした。こんな過程のなかで，それでも11回目には，泣きながらも療育者のだれかれの様子をそっとうかがったり，元気なときには知らん顔をしていながら，泣きだせば大角の所へ来るようになっていった。

２）２者関係形成期（12回～14回）

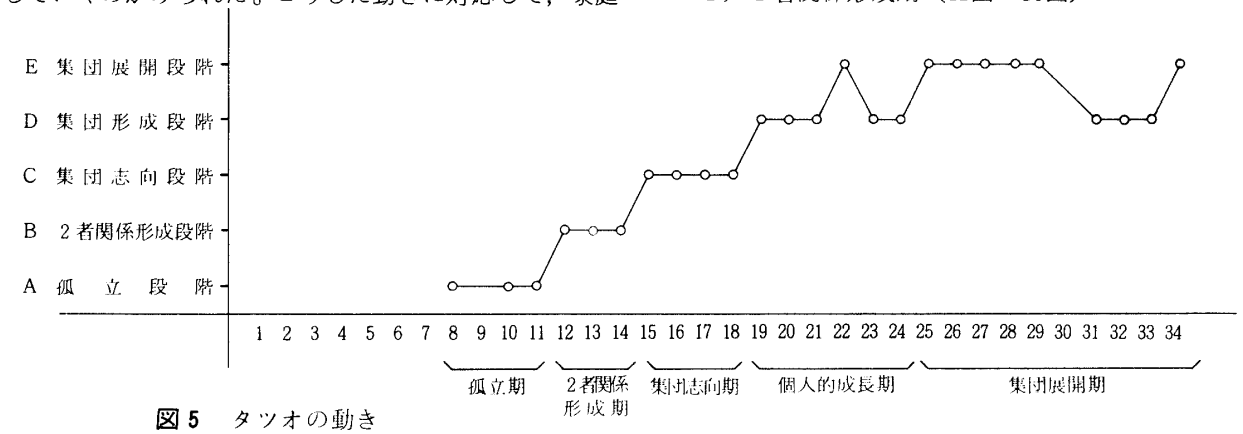

図５　タツオの動き

夏休みが終って9月にはいると，タツオにはいくらかの変化がみられてきた。このグループにもかなり慣れてきたようで，大角に対する甘えも見られるようになっている。12回目，13回目には，前ほど母親を捜して泣くことがなくなり，14回目にはすっかり慣れてしまった様子で，発声も増え，ヤスヒデをこわがる時など，まるで猿の子のようにしっかり，担当者，大角にくっついてくるようになったタツオであった。

他の子どもに対しても，たとえばヤスヒデがひっぱるのを押し返したり，コウジの髪を自分からひっぱったり，つき倒したりするなど，反応が目立つようになっている。さらにまた，「手をつなごう」の音楽に合わせて，より親和的に，他の子どもと手をつなごうとする動きがみられたこともある。

食事に関しては，14回目に，大角に食べさせてもらってではあるが，もちろん初めてここで，すっかりお弁当を平げた。この時の食事はカレーライスで，母親の話によれば，タツオはいつも家ではチャーハンやカレーのように味のついたものが好きだということなので，私たちは，タツオがお昼をここでいつでもすっかり食べられるようにするために，当分の間タツオのお弁当をカレーライスにすることにしたのだが，この方法はかなり当を得たものであって，次第にその意図は効を奏し，タツオが自分ひとりで食べるようになる方向へのメドまでついたのである。

3）集団志向期（15回〜18回）

この頃になると，タツオはこのグループにすっかり慣れ，来所するのを楽しみにしている様子がみられるようになった。「手をつなごう」がどの療育者とでもできるようになり，「地球をドンドン」ではみんなと一緒に音楽にのって，本当に楽しそうに体操する姿がみられた。また，グリーンベルトへ散歩に行くような折には，担当者，大角に対して一層の甘えが目立つようになった。

第15回には，療育者のまねをして楽しくリズム運動ができ，特に大角とはビーチボールの投げあいっこができたり，相互のかかわりがより深まってきた。次の回にもグリーンベルトへ散歩に出かけ，たまたまバスが道を走って来る所をみると，その近くへかけよって行き，幾度もバイバイと手をふるタツオであった。

全体に，とても元気いっぱいで，動くたびに発声がかなりみられるようになり，あちこち動きまわりはするけれどもまた，どこへ行っても最後には必ず大角の所へもどって来るという形で，2者関係でのつながりを基盤として，集団の中へ入りこもうとする志向性が明確によみとれた。初めはできなかった排泄も，15回目あたりからここでもするようになったことをつけ加えておきたい。

4）個人的成長期（19回〜24回）

この時期，グループ全体としては，いろいろな条件で動きが停滞していたにもかかわらず，タツオの成長には目をみはらせるものがあった。この時期でのもっとも大きなでき事としては，やはり何といっても食事の習慣がかなりなまでに自立していったことであろう。

私たちの討議のなかで，タツオに対しては三つの目標がかかげられたが，そのうちの一つ，食事の自立をいち早く，その次の回には達成してしまったのである。このことは，私たちにとって喜びであると同時に驚きでもあった。これには，先にもふれたように，お昼の弁当をずっとタツオの好きなカレーにし，少しでも自分で食べるようにしてきたことが寄与したであろうし，その回での主題がたまたまカレー大会であったこともよいタイミングではあったのだろうが，こうした集団療育の場を契機とした母親の，家での努力が実を結んだものとも思われる。母子通所形態の集団療育活動の意義づけを，私どもはこんなとき，改めてまた考えさせられる。

また，この時期には，タツオはどの療育者にもベタベタ甘えるようになった。でも散歩の行き帰りなどは，ダッコちゃんのように大角にはしがみついても，他の療育者と一緒になると自分で歩くなど，主たる担当者と他の療育者とを弁別するタツオであった。

その他，トシコの後にくっついて滑り台をすべったり，コウジの横に座って一緒に遊ぼうとするなど，積極的にこうした他の子どもに対する働きかけも時々みられた。大角自身もこんなときタツオを他のセラピストにまかせたまま，安心して他の子どもと遊ぶことができるようになり，遊びの拡がりと共に対人関係自体に拡がりが感じられたのもこの時期においてである。

5）集団展開期（25回〜34回）

この期には大角へのベタベタ甘えも，ぐっと少くなり，タツオはもはや担当者の手を離れて，グループみんなのタツオになっていったといえる。ただ，もちろんグループの中のタツオとはいっても，子どもたちひとりびとりの条件がかなり違うことから，実際には療育者たちの後にくっついて遊びまわることが多かった。タツオ自身，自分から働きかけて他の子どもと遊ぼうとするのだが，療育者の方で他の子どもと遊ぶことができるような状況を作ることがずい分困難であったため，結局意にそわない結果におわったことも一再ではなかった。

ヤスヒデにちょっかいを出したり，トシコの後にくっついて一緒に遊ぼうとするタツオ。ブンブン飛行機やフリスビー，タコあげ，サッカーで遊んだ日などには，自分からまったく能動的，主体的に，大角をはじめ療育者の誰とでも一緒になって遊び，走りまわっていた。ボー

ルの投げあいも，この時期には誰とでも頻繁にみられた。

第24回には，オルガンに向い，１度弾くごとにふり返って，療育者のみんなに拍手を要求し，一斉に手をたたくと喜んで幾度も鍵を叩いていた。また，ミカンを食べながら，療育者のひとり永川の顔を見て，顔いっぱいを口にして，「ウフフ……」と声を出し幾度も笑いころげたのもこの日である。

主たる療育担当者の大角からすれば，こうして自由にのびのび動きまわるタツオの成長に心からの喜びを感じながらも，タツオが今はもう自分の手から離れてしまったことが寂しく，他の子どもと遊びながら，その発育ぶりを，集団の中へのとけこみを，見守っていることが多い時期となったのである。

＜まとめ＞

おくれて参加し，他の子より療育期間は短かい方であったけれど，タツオの集団への入りこみはまことに着実であった。この療育グループにおけるタツオ自身の集団化の過程を追っていくとき，ひとりびとりの子どもについてそれを段階づけるため，一応の基準として設定した，「２者関係の確立を基盤としての集団志向への歩みの段階」を，タツオはきわめて典型的な形でのぼりつめていったといえる。

図５からもうかがわれるように，他の子どもと違って，タツオのこのグループにおける療育の流れを追っての時期区分は，したがって，その「歩みの段階」とまったく対応させて，同じネーミングでよばれることが可能であったし，またその段階をほんとうに堅実にふみかためつつ展開していくあとづけが得られたのである。担当の大角とのガッチリした２者関係を先ず形成した上で，それを基盤として集団の中に入りこみ，そのことがより一層，タツオ個人の成長をうながすといった段階を経て，理想的な形で集団の中の一員としてのびのびと動けるようになっていったこの展開過程が，私たちには大へんたのもしく思われた。

まだ４才に達したばかり。おそらくどんな集団の中でも，その一員としての成長が，今後一段と期待されるであろう。

Ⅳ　グループ全体としての集団化への動き

ひとりびとりの歩みはまさにさまざまである。きわめて着実に主たる療育担当者とのかかわりのきずなを固め，この２者関係の確立をほんとうに基盤として根をおろしながら，全体としてのＭＲＴグループの一員として，まさしく集団の中での動きといってよい動きを展開していった場合もあれば，療育のセッションごとの集団構成のありかたのいかんによって，すでにかなり集団志向がみえはじめていたにかかわらず，ふたたび２者関係に限局されたかと思うと，次にはまた集団の中でかなり生き生きした動きが示されるなど，変動の激しい場合もみられた。さらにまた，１年間の療育をとおして，さまざまの条件の重なりもあって，意図したとおりの集団志向にふみこめず，いたずらに自分ひとりの動きの中にとどまった場合もなかったとはいえない。

これらの歩みは，しかし多様であろうとも，やはり，集団療育の意図するところは，単なる療育状況の物理的空間的な集合場面にとどまるべきではない。ある一組の療育活動の展開が同じ場面状況の中で，また別に展開しているいま一組の療育活動にゆさぶりをかけ，相互に影響しあいながら，全体としての集団意識をかもしだす。もはやそれは特定の誰かと誰かとがという形でなく，子どもの集団と療育者の集団とが，やはり一つのまとまりをもった機能として，混然としてではあるがかかわりあっていく，いわゆる集団化への方向へと，ふみだすことが期待されるのである。

もちろんそうした形への展開は，障害をにない，発達段階での遅滞をさまざまに示す子どもたちにとって，一朝一夕に見出されるものではない。この１年間という限られた療育状況の中で，集団化をどのような形にまでおしすすめることができたのか，そのあとづけはやはりきわめてたどたどしいものであった。でもそれなりに，こうして今，集団全体としての動きを総括してみると，やはり時期的な区分として，先にも提起した五つの時期に，大まかに区分されるもののように思われる。図１から図５までのそれぞれの子どもの動きを重ねて，全体としての段階づけを図示したのが図６である。以下，この図にしたがいそれぞれの時期に即して若干のまとめと考察を行っていきたい。

（Ⅰ）分散期（１回～５回）

第１回より６月中旬までの第５回までの時期がこれにあたる。当初は，その前年度から継続療育のヤスヒデ，トモオ，アキヒサ（これはその後しばらくしてグループを退き，ここでの考察には省かれている），さらにこの年はじめてこのグループに加わったコウジといった男子ばかり４人の子どもで出発した。彼らは年令，体力，能力ともにかなり大きな開きを持っており，その動きは，それぞれにみてきたように著しく異なっていた。子どもたちはそれぞれまったくバラバラに行動し，療育担当者たちは，そうした子どもの動きに振りまわされ，さらに自分の主として担当する子どもの療育目標にしばられて，自分たち相互の間においても十分な疎通性はなく，いわば個別的な療育が，物理的に共通の場で行われているにすぎない様相を示していた。

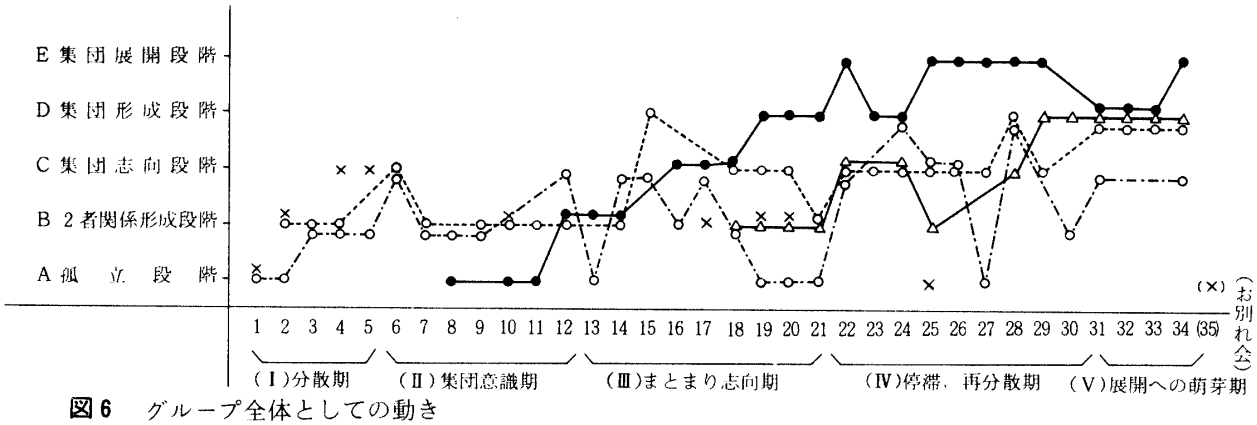

図6　グループ全体としての動き

それぞれの事例に即してみると，ヤスヒデは前年からひきつづき担当していた療育者，山田にベッタリとくっついて離れず，山田の側でもこうしてのしかかってくるのにすっかり圧倒され，ウンザリしてしまい，動きはおのずから硬化して，そのためこのヤスヒデの発達を促進せしめるのにブレーキとなったのではないかと思わせるフシもでてきた。コウジは最初にはまったくの分離不安を示し，全然集団になじめなかったが，3～4回と療育が重なってきて，次第に療育担当者，西尾との間である種の安定を得るまでになった。トモオは，昨年のかかわり体験の蓄積を土台として，この初期の段階は珍らしく出席状況も良好であっただけに，療育者，浅田との関係を急速に深めうるかの期待がもたれた。

しかし，これらはいずれも，それぞれの療育者が担当の子どもとまったく個別にかかわっていただけであり，全体として，グループなどとよべるものでは到底なかったのである。

（Ⅱ）集団意識期（6回～12回）

第2期は，6月から9月まで，間に夏休みをはさんでの7回である。この時期は，次の二つの要因によって，それぞれの子どもたちがまったく別個で没交渉であった分散期から，一歩ふみこんで何とか集団内にいることを意識しようと動き出した時期といえる。

一つの要因は，子ども集団において，大きな個人差が問題となっていたが，そのギャップを埋める役割をもってのタツオの登場があったことである。彼の参加によって，個人差の大きい子どもたちの間につながりができ，彼を媒介として集団としての動きが，全体としてまとまりをもつようになってきたのである。それはまさしく，他のヤスヒデ，コウジらの動きを促進させる潤滑剤としての役割を果すことになったようにも思われる。

いま一つの要因は，療育者同志がただ主として自分が担当することとなった子どもとかかわることのみにとどまらず，何よりも，療育者自身，お互いに交流しあい，集団としてのまとまりを志向したことにある。その志向性に即して，療育者は「自分の子どもに」といった眼にしばられることなく，それからはなれてかなり自由に，集団全体に眼を向けることができるようになってきたのである。夏休みの間，子どもたちの兄弟をもまじえて，親子・療育者ともどもに，一泊二日の夏期合宿をもったのだけれど，これもまた療育者同志の交流，意志疎通をより深め，また対象となった子どもたちを見る視点もかなり拡がって，限局された状況をつき破り，「集団の中にいる子どもを」という眼で生き生きと流動的に子どもたちとかかわりあえる端緒となったいい経験であったように思われる。

トモオの欠席が目立つようになってきたのはこの時期からであり，その点からしてトモオ自身はこの全体としての動きの展開には寄与していない。しかし，当初分離不安を起して，排尿をも拒否していたタツオは，療育担当者，大角との関係が次第に確立してきたし，コウジもこの時期において，療育担当者，西尾との関係を確立させることにより，その関係を基盤として集団に参加することの期待がもたれた。さらに担当者山田とベッタリ関係に終始していたヤスヒデも，この時期に一度集団の中での大きな動きの契機作りとなったこともあって，条件が整いさえすれば，十分集団の中で集団の一員として成長できる可能性を持っていることがわかった。ひとりびとりの動きはそれぞれ多様ながらに，いずれも，限局した枠からはなれ，集団の中にいるとの意識が，子どもにも療育者にも強まってきた時期といえよう。

（Ⅲ）まとまり志向期（13回～21回）

9月から11月までの秋の9回がこの時期にあたる。

この前の時期で「集団の中にいる」との意識が強まり，何とか集団としての動きの萌芽がみとめられたのであるが，この時期ではさらにそのまとまりの志向が強くみられ，集団が集団として一つの歩みをふみ出したと考えられるもっとも大きな展開が示された。

そうした状況の中で，子どもたちは，集団の力を糧として，自分たちの中に内包する発達の可能性を発揮し，

一段と力強く成長していく方向がよみとられた。また，10月からはトシコの参加を得て，子どもの仲間に初めて女の子が加わることとなり，男女混合の集団となったことは，この集団を集団として機能せしめていく上にまた有意義なタイミングでもあったと考えられる。

さらに，療育者の側においては，お互いの信頼関係がより安定し，いわゆる「集団化」が成立，担当する子どもとのかかわりをも固定することなく，自由にかつ有機的に動きが見られ，常に集団全体を見とおしながら，集団療育の名にふさわしい計画的な療育活動を行っていくことが出来るようになってきた。それはまた子どもの側の動きとも統合されて，全体で一つのまとまった動きとして行動化されていくのである。

個々の子どもについてみてみると，この時期では誰よりも，タツオの集団参加が急速な展開をみせる。当初の孤立を脱し，集団の力によって成長が期待された彼が，次第にむしろ集団の核となり，集団の動きの先頭に立つような役割を演ずるようになる。この時期の後半では，すでに担当者，大角からはなれて自立しようとの動きすらみせるタツオである。ヤスヒデは，この時期，担当者，山田とのベッタリ関係から時によってはかなり離れられるようになり，わずかではあるが，外界とのつながりに拡がりがみられるようになった。トモオは珍らしくこの時期に３回続けて出席したのだが，それまで長期にわたる欠席によって，残念ながら，集団の中での動きはやはりまったく期待できず，出てきてもふたたび担当者，浅田とのみの関係におちこんでいた。そしてこれ以後ほとんどまったく姿を見せなくなってしまったのである。集団療育において継続して出席することの意義をこうしたときまた改めて考えさせられる。年令的にも，動きも他児より劣るコウジは，集団の中での動きの大きな変動に十分ついていけなかったこと，担当者，西尾の眼が，コウジのみに，というのをはなれて広く集団全体に向けられるようになったこともあって，時としてとり残されることがみられたし，トシコは最初から分離不安はなかったものの，まだ集団とは無関係に動くことが多かった。しかし，彼らのそうした動きをとりこんで，なお集団は集団としての動きにすすんだ感がある。

（Ⅳ）停滞・再分散期（22回～31回）

晩秋から冬にかけての10回がこの時期にあたる。この時期は，一度まとまりの方向が志向されてきた集団が，主に療育者の方のさまざまな要因によって，ふたたび集団的機能を失い，個々の療育場面に戻ることもみられるといった，集団療育という過程では停滞したといわざるを得ない時期であった。

そうした状況で，子どもたちは集団全体の停滞の影響をうけて，集団化という視点からは落ち込んでいくものもみられたし，また一方これまでの時期でかなり蓄積された力を基盤として，それなりに集団の停滞をのりこえて，ひとり成長するといったものもみられた。

停滞・再分散をもたらしたと思われる療育者側の要因は次に三つ程あげられよう。まず第１には，男性の療育者が事情によりこのグループから離れたことによる人手不足，男手のなさという点がある。それがためどうしても子どもの大きな動きについていけない結果をもたらしたことも一再でなかったし，結局集団化をはかる力が集中できなくなってしまったのである。

第２には，新しくトシコが参加し，集団とは無関係に動きまわるので，主たる担当者，浅田がこの子との関係づくりに重点をおかざるを得なかったために，やはりグループ全体の統合への努力が二義的となったこと，それ故，一層力の分散という結果がもたらされたことである。その上，その頃流行した風邪をはじめとする疾病，あるいはまったくやむを得ない個人的な事情によって，子どもも療育者もともに欠席がちとなり，セッションによっては，まったくグループとなり得なかった日もあったほどである。これが第３の要因とも考えられよう。

このままでは，再分散にとどまらず，この療育グループ自体，解体のやむなきに到らざるを得ないとまで思われた。ＭＲＴグループでの最大の危機が訪れたのである。しかし，そのままで療育をうちきるには，子どもひとりびとりの集団内発達を志向する療育の理念に反することにもなるし，また，その対象の子どもたちに対してはとり返しがつかないこととともなる。まったく偶然のきっかけではあるが，そのような折，夏のコロニー合宿の体験をとおしてあらためて障害児療育にかかわることを強く志向しようとした，今ひとりの仲間があらわれた。永川である。この永川の参加によって，他の療育者たちもふたたび精神的にも立ち直ることができた。この子どもたちの療育をどこまでも「集団の場」でという基本理念に改めて立ち戻ることができ，その共同体意識にもとづいて活動はふたたび活発化していった。

子どもひとりびとりについてみてみると，まずこの集団の停滞によって，動揺し，とり残されてしまうコウジがいた。しかし一面これらの停滞にもかかわらず，力強くこの壁をのり越え，これまでに蓄積された力を基盤にさらに大きく成長していったタツオもいた。そして，その中間にあたるものとして，担当者，浅田との関係の中で成長の芽をのばし，少しづつではあるけれど集団に意識を向けようとするトシコがいた。そしてまた「集団化」への萌芽は時折示すことはあっても，ともすればこの時期の間ほとんど担当者，山田とのみの関係に終始していた

ヤスヒデにとっては，後半にではあるが力強くたくましい男性療育者永川の登場によって，次の時期での一段の発達を十分期待させるに足る変化を示しはじめたのである。

子どもたちの動きは，ふたたび2者関係を基盤としてのバラバラのひとりびとりの様態に立ち戻り，集団としての動きの志向性は停滞した。しかし，いうなれば，これらはさらなる展開のためのプラトーの時期であったのかも知れない。最後のわずか3回ではあるが，次の展開への萌芽期とよぶにふさわしい時期を，私たちはこの停滞の時期があったが故に，これにつづいて迎えることができたこととも思うのである。

（V）展開への萌芽期（32回～34回）

かくして最後の時期，3月の3回がそれにあたる。ようやく厳しい冬をくぐり抜け，春の訪れの気配が何となく胸ふくらませる季節となった。子どもたち，療育者たちも皆それぞれ次年度にむけて，方向が決まった時期である。これでこの療育の場にサヨナラを告げる人たちも多い。1年間を区切った療育であることの意味，さらにその限界についても，このようなとき，仲間のうちで何度も討議の話題にのせ，あらためて深く考えさせられたのである。

この時期，集団としては，機動の中核となった療育者，永川の動きに，他の仲間も先にものべたようにそれぞれの持ち味を刺激され，集団としての療育者が集団としての子どもに強くかかわりをもとうとするなど，集団が全体としてふたたび強く凝集し「集団化」へといった方向に向けて展開の兆しがみられたように思われる。

特に，永川の参加を得てからのヤスヒデの対人関係の拡がり，行動の活発さは，私たちの彼らに対するこれまでの，さらにこれからの取り組みの意味を考える上で，大きな問題を投げかけたといえる。しかし，この年4月，養護学校への入学が決まった。2年間にわたる私どものグループ療育での取り組みを，そして特にその最後の永川とのかかわりを基盤として，彼の成長のさらなる展開に心から期待をよせたいのである。コウジも通園施設にようやく正式入園できた。ヤスヒデと同じく，これからどのように成長していくのか，またかかわりをもてるのか，経過を見守りたい。トモオは，第Ⅳ期に1回，第Ⅴ期ではお別れの会に顔を出しただけにとどまった。こうした散発的な形での療育的な場への参加は，状況はいろいろとやむを得ないものであったにしろ，この私どもの意図するところに沿っての年間にわたる療育の流れの線にはなかなか乗り得ないものであって，展開は期待しがたい。心ならずも打ちきらざるを得なかったケースである。またトシコ，タツオの両名は，年令的にもまだ3才をこえたところであることから，51年度にもなお継続してこの場での集団療育をつづけることにしている。

こうして，それぞれ行く先も決まり，療育者の方もお別れ間近であるとの意識も手伝って，形の上でのまとまりもより一段と強化され，たしかに集団への展開の芽生えといっていい雰囲気のなかでこの年のＭＲＴの療育は終った。心残りもなお多々存しながら，今一つのことをなしおえたと，何かしらほっとしている私どもである。

Ⅴ　要約と結語

対象とした子どもたちのさまざまな個人差，またそれとかかわった療育担当者ひとりびとりのかかわりの様相，それぞれの違いはありながら，一様に集団療育のめざすところ，集団の一員として個々が位置づけられ，いわゆる「集団化」への動きをおしすすめながら，グループ全体また集団としてまとまる方向へ展開することを究極的に志向する線に沿って，以上，五つの時期についての考察を行ってきた。それらの要約は最後に次の表2に示される。

子どもにとっての集団の意味は大きい。障害をもつ子どもたちに対しても，彼らをひとりの人間として，何よりも彼らとかかわる〝誰か〟との交流の中で，生き生きと，豊かに発達していく主体的存在としてとらえる視点に立って，この種の発達をより一段と促進していくためには，私たちは，すすんでこうした集団の中で，彼らとかかわる〝誰か〟との体験を積極的にもたせてやることが，何よりも必要だと考える。ともすればそれらの障害の故に，1対1の関係に限局しがちなおそれもないとはいえない。それだけにこそ，もちろんそうした2者関係の確立を基盤とした上のことではあるが，集団の中でのゆさぶりかけをより一層強化していきたいと思うのである。

私たちの力足りなさもあって，今回この療育グループで，はじめにめざしたところのものが十分成果を示したとは，もちろん云いがたい。ただそれでもなお，個人の子どもの能力・体力・環境条件，さまざまな個人差はあろうとも，主として担当した療育者をはじめ，療育者グループとのかかわりをとおして，集団という状況におけるゆさぶりかけを体験しながら，それぞれある種の変容を示してきたことだけはたしかである。いわゆる「集団化」の歩みを着実にふみ出したものもあれば，依然停滞の様相のままにとどまったものもいた。しかし前にも要約したように，集団全体の動きとしては，やはりこうした停滞そのものも，次なる展開への踏み石となるものであることを示唆してくれるようである。

「歩み」はたしかに遅々たるものであるかもしれない

表３　グループ全体の集団化への動きのまとめ

段　　階	子どもの動き	療育者の動き
Ⅰ　分散期（１回～５回）	子どもの間の個人差（年令・能力・体力・動きなど）が大きく，子ども同志での動きはまったくとれず，めいめいがバラバラである。	それぞれの療育者は担当する子どもの個人目標にふりまわされ，療育者同志の連繋も弱いまま，各自が孤立して個別の努力をすすめる。
Ⅱ　集団意識期（６回～12回）	個人差をうめるようなタツオの参加で他の子どもの集団の中にいることの意識がみられはじめ，成長を促進させられる。	自分の担当する子どもとのかかわりにとどまらず，集団として動きが出かかっている。夏期合宿を通して療育者集団の結びつき，疎通性が高まる。
Ⅲ　まとまり志向期（13回～21回）	集団としてのまとまりへの志向性がみられ，集団が集団として一つの動きを示すようになる。そして集団の力によって，自分の力をより発揮できる子どもがでてきたり，さらに積極的に集団の中でその先頭に立つことによって成長する子どもが出てきたりする。	療育者側でのいわゆる「集団化」が成立，担当する子どもとのかかわりをも固定することなく，自由に有機的に動けるようになり，さらに集団全体をみとおしながらの計画的な流れが自然に出てくる。
Ⅳ　停滞・再分散期（22回～31回）	主として療育者の方の要因にもよるが，集団の動きが停滞気味となる。主たる療育担当者との関係に限局した中で，どちらかといえばめいめいの動きがふたたびバラバラになる。たとえば集団の停滞によって動揺し，とり残されてしまう子どももいれば，それなりにその壁をのりこえて成長の方向へふみ出す子どももいる。	病気，その他さまざまのやむを得ない療育者の側の要因による力の分散ということもあって，個々の療育場面に還元することも見られ，集団としての機能は停滞気味になったが，その後半には，新しい男性療育者を得てふたたび活性化しようとする様相がみられてきた。
Ⅴ　展開への萌芽期（32回～34回）	新しい療育者を得て集団がふたたび強く全体として凝集し，いわゆる「集団化」の名にふさわしい展開の方向への兆しがみられてくる。	療育者集団の中にふたたびかたい積極的連帯がうまれ，次年度に向けての方向も決っただけに，より積極的に，集団としての療育者が集団としての子どもとかかわっていこうとする方向をとる。

しかしそれらのたどたどしい歩みも，子どもひとりびとりにとっては，まさしくやりなおしのきかない，その時期その時期における，独自のかけがえのない体験である。またそれらの子どもとかかわりつづけた療育者のひとりびとりにとっても，同様，新しい眼の見開かされた，何ものにもかえがたい貴重な体験であったことにちがいはない。

これらの体験はまた相互に交錯しながら，その深まりと拡がりといった次元で展開する。これらの展開が，発達障害幼児の集団療育で意図するところの究極であるとするならば，この年，ここでのこれらの実践の記録は，まだまだその第一歩を踏み出したにすぎないものというべきであろう。今後さらにこれらに連なる療育実践の中で，彼ら発達障害幼児の発達を促進するもの，あるいは妨げるもの，さまざまの条件をより的確におさえていくことから出発して，私たちは，なおこの子たちの限りない発達に心からなる信頼をよせつつ，こうした視点に立っての，ささやかながらさらなる援助の手をさしのべたいと考える。

（昭和51年６月13日）

原　　著

GROUP THERAPEUTIC PRACTICE WITH THE MENTALLY HANDICAPPED CHILDREN (2)

– Towards the group formation on the basis of the establishing mutual relationship –

Eiji MURAKAMI, Norio EGUCHI, Kuni ASADA, Atsuko NISHIO,
Keiko YAMADA, Mihoko OSUMI, and Kunihisa NAGAKAWA

We have tried the group therapeutic practice toward 5 children who are the severely mentally retarded and/or autistic children, and whose age is ranged from 3 to 10 years old for this year.

We aimed, in this report, firstly to clarify the individual development for the mentally retarded which is to be facilitated through the mutual contact in those group, secondary to look for the group forming process for them which is also developing as a group itself.

1) In this practice, we assumed the process in which those children have grown and developed through the mutual relation experience in this group. It has following five stages,

I. Isolation stage
II. Establishing mutual relationship stage
III. Group oriented stage
IV. Group forming stage
V. Group growth stage

To be brief, from the state of entirely isolation, those children participated into the group on the basis of the establishing mutual relationship, and showed growth and development by the group dynamics all the more.

2) Furthermore, when we regard the group as a whole, there we can look for the progressing process in the group itself; It has five periods,

I. Segregated period
II. Group-conscious period
III. Group oriented period
IV. Regressive and re-segregated period
V. Expectation to group growth period